

「語られる聖典」としての儒学テキスト

近代日本の学知の基盤には、近世儒学の伝統があったと言われる。その伝統は明治期に入ると、近代学校の設立に伴い次第に衰退した。ところが、その伝統を宗教学的に捉えなおすと、儒学テキストが「語られる聖典」の特徴をもっていたことは注目すべき点であろう。こうした視点から、その伝統における漢籍の「読書」の宗教的な意味を再考してみたい。

儒学テキストの「読書」

近世儒学の伝統では、子どもたちは四書五経などの「経書」を繰り返し声に出して読んで、その内容を自然に覚えた。手習塾、いわゆる「寺子屋」における学習と教育は、師と弟子のあいだの、信頼と尊敬にもとづく一対一の人格的で個人的な師弟関係であった。江戸時代の有名な儒者の貝原益軒は、師が弟子にとって模範でなければならないこと、さらに師に対する弟子の信頼と尊敬が不可欠であることを強調している⁽¹⁾。

手習塾における「読書」とは、声に出して暗誦することを意味した。それはいわゆる「素読」であった。弟子たちは素読をとおしてテキストを記憶した。テキストの言葉の理解だけでは、表層的な意味理解にすぎなかった。ところが、心や眼や口など、身体の多くの器官をとおして読むことで、儒学テキストの素読を終えると、独力で自在に漢籍を読み解くだけの学力を習得できた。儒学テキストの素読によって〈身体化〉された「儒学の知」は、日々の生活の場で実感をもって、テキストの意味が次第に深く理解され、それが日々の生き方の中に具体化されていった。こうしたプロセスを経て理解された儒学テキストは「書かれた聖典」でありながら、それが同時に「読書」をとおして「語られる聖典」にもなった。

記憶による儒学テキストの知の理解

こうした脈絡において、「語られる聖典」の視座から「素読」の宗教的意義を捉えかえすと、その知の修得には、イスラームにおけるクルアーンの朗誦やヒンドゥー教のウパニシャッド聖典の暗誦などと類似した根源的パターンがあることに気づく。漢籍の素読は、教育史学者の辻本雅史も言うように「身体的読書」であった。それは今日、私たちがイメージする読書のような黙読ではない。本は黙読していると、本を前後に行き来して読むことができるし、言葉の意味を確認しながら読み進めることもできる。そのことによって、本の内容を論理的に理解することができる。しかし、素読は音読である。それは息の出入れ(呼吸)、声の響きや抑揚、リズムなどを伴う身体的な言語活動である。辻本が強調するように、古典テキストは素読によって「日常の言葉とは異なった次元で、独特の漢語の言語形式がまるごと幼い身体に刻印・体得される」。思考が言語活動であることを考えると、「素読で身についた漢語の形式がいわば『精神の言葉』となり、思考の様式を形づくる」ことになった⁽²⁾。

江戸時代には、四書五経や史記・漢書をはじめ、多くの漢籍が学者文人たちによって訓点・注釈を加えられ翻刻された。弟子は師から訓読法の要領を教してもらおうと、後は一人で多くの漢籍を読むことができた。子どもの頃、師が訓読するのに倣って儒学テキストを記憶しておく、素読によって修得した儒学テキストの知の理解は生涯、徐々に深化していく。素読すなわち訓読によって読む文章の内容は、ある程度まで理解できたとしても、子どもには漢籍の内容があまり理解できず、師が読んで聞かせる文章をただ繰り返すだけにすぎない。しかし、素読によって子どもの心

にしみ込んだ多くの漢籍の文章や句は、成長するにつれて、その意味が徐々に理解できるようになる。

中国哲学者の竹内照夫は、著書『四書五経』の中で、素読が「解釈にわたらないから読書進度が早く、学習期間は短かくても多くの書物をあげることができる」と言う。ところが、素読すなわち訓読は「一種の速成直訳法であり、かつ極めて定式的である」ので、「訓読は翻訳の予備段階にとどまり、原作の周到正確な、日本語への書き換えということができず、大づかみの内容理解にとどまる」とも言う。素読によって読む文章の内容は、ある程度まで分かるが、その程度は読む人の知識教養の程度に対応していた⁽³⁾。江戸時代に普及した訓読による漢籍の「読書」は、四書五経の素読を基本としていた。そのことが当時の読書人口の増加を促し、さらには後に専門的な研究者を輩出することにつながっていった。

漢籍の「読書」と知識人

江戸時代の知識人は漢文で考えたという。人びとは素読によって学問の言語能力を獲得し、漢文のなかでも、儒学の概念を知的メディアとして思想を形成した。近世の学知はおもに漢文と儒学思想に規定されていた。素読は漢文という知的言語を修得するプロセスであった。漢文による儒学の知は漢籍の素読をとおして、人びとの身体にしみ込んで、心の深みへ次第に深化していった。「書かれた聖典」としての儒学テキストが、素読をとおして、まさに「語られる聖典」となっていったのだ。素読によって記憶された儒学テキストは、最初はその内容が理解できなかったとしても、次第にテキストが理解できるようになった。そうした点に、儒学テキストの「読書」のおもな特徴があった。明治期になって近代学校が普及し、儒学を学ぶ伝統がなくなると、儒学は価値のない過去の学問とみなされ、儒学テキストの身体的な「読書」の伝統は自ずと衰退していった。

明治期から大正期に勉学時代をすごした知識人たちは、身体的な「読書」への郷愁を共有していたと言われる。国文学者で文芸評論家の前田愛も指摘するように、「音読から黙読へ」という流れのなかに、「近代読者の成立」を位置づけることもできるだろう⁽⁴⁾。たとえば、哲学者の西田幾多郎(1870～1945)もそうした一人であった。西田はエッセイ「読書」(1938年)のなかで、小さかった頃、「昔祖父が読んだという四箱か五箱ばかりの漢文の書物を見るのが好であった」と記している。西田のこの言葉は、儒学伝統の名残りを彷彿とさせる。またイスラーム学・東洋哲学で知られる井筒俊彦(1914～1993)は、子どもの頃、父親から漢籍の素読を強いられたという。彼は坐禅とともに『臨濟録』、『碧巖録』、『無門関』などの禅籍も読んだ。井筒が遺した蔵書には、数多くの漢籍も含まれるが、彼は幼少期から生涯にわたり漢籍にも親しんだ。そうした漢籍の「読書」は、井筒独自の「東洋哲学」構想にとって重要な契機の一つになった。このことは井筒哲学を理解するうえで極めて興味深い。

[註]

1. 貝原益軒(松田道雄訳)「和俗童子訓」(『貝原益軒』日本の名著14、中央公論社、1969年)、195頁、200頁。辻本雅史『「学び」の復権』角川書店、1999年、142～145頁。
2. 辻本雅史『教育の社会史』(放送大学教育振興会、2008年)、83頁。
3. 竹内照夫『四書五経—中国思想の形成と展開—』平凡社、1965年、238～240頁。
4. 前田愛『音読から黙読へ』『近代読者の成立』(前田愛著作集・第2巻)、筑摩書房、1989年、122～150頁。